

# 贖罪婚

～それは、甘く歪んだ純愛～

## プロローグ

成瀬真那、二十三歳、新婚。

夫、時生の姓を名乗るようになって、一週間ほどが経っただろうか。今夜も、真那は贖罪のため、夫に抱かれていた。

かつて傷つけた男。自分を憎んでいるはずの人に。

時生はこの結婚について、真那を手に入れ、自分の地位が補強され満足だと言わない。

――過去に縫っているのは、私だけ。愛しているのも、私だけ……

苦い切なさが胸の中で膨れ上がる。

だが、真那の身体は、淫らな従順さで時生を受け入れていた。

「んっ、んん……っ……」

声を上げないように気をつけても、抽送のたびに息が乱れた。

「っ、あ、あ」

耐えきれずに、固く閉じていた唇から喘ぎ声がこぼれる。

みっしりと中を満たす肉楔が引き抜かれ、また押し込まれるたびに、身体中にさざ波のような熱

が広がってゆく。

昂る肉杭を根元まで呑み込まされ、真那は思わず腰を揺すった。

「いや、……ああ」

繋がりが合った場所から、甘い蜜が幾度となくしたり落ちる。

「あんっ……ああ……だめ、奥、そんなに……ああ……っ……」

快楽のあまり、視界が歪んだ。

時生の手が、必死で背ける真那の顔を、強引に前に向かせる。

汗に濡れた唇を押し付けられ、舌先で歯列をなぞられて、真那は従順に不慣れた舌先で応えた。

「く、ふ……」

口づけの合間にも隘路を攻め立てられ、くちゆくちゆという淫猥な蜜音が響く。

愛おしくて、気持ちよくて、真那の身体中から力が抜けていく。

けれど、どうしても、彼の顔を見られない。こんな乱れた表情を見られるなんて、恥ずかしくて耐えがたいからだ。

「そんなに俺の顔を見たくありませんか」

真那を突き上げる動きを止め、『夫』の時生が問う。

時生は、笑っていた。まるで真那の拙い反抗がおかしくてたまらないとも言おうように。

うっすらと汗に濡れた彼の顔は、吸い込まれそうな妖艶さを湛えている。

「そんなこと……ああ……」

真那は、焼けるような熱杭に貫かれたまま、甘い疼きに歯を食いしほる。

時生と目を合わせたくないのは、愛されていないという事実が心で負けそうだからだ。

身体はこの上なく慈しまれ、繰り返しの絶頂を刻み込まれているのに、時生が真那に向けてくれる

愛情は、三年前に消滅してしまっただから。

引き締まった胸をかすかに上下させ、時生が薄い唇に笑みを浮かべる。

「俺の顔を見たくないなら、目隠しをしましょうか」

「……っ……え……っ……」

怯えた真那の顔に、アイマスクが掛けられた。

時生の匂いにする。彼が睡眠時に使用しているものなのだろう。

「な、なにを、時生」

視覚を奪われ、真那は戸惑った声を上げる。

「手も、俺に触らずに済むようにしますね」

時生の声音は、相変わらずなんの感情も感じさせない。

ずるりと音を立てて、中を穿っていた時生の肉杭が抜け出た。

「あ……」

みっしりと埋め尽くされていた淫洞が、物欲しげに蠢く。腿の辺りまで蜜に汚れたまま、真那は耳を澄まして様子をうかがう。

時生に満たされていた場所が、外気に触れて冷え始めた。

「なにを……しているの……？」

視界を塞がれたままの真那の手首に、ぐるりとなにかが巻かれた。

「自転車に乗るとき、ズボンの裾を止めるマジックテープです。痛くはないはずですが」

真那の両手首をひととめにし、縛りながら時生が言う。

「え、い、嫌……」

視界はおろか、手の自由まで奪われてしまった。

全裸でなんとという破廉恥な格好をさせられてしまったのか。

困惑する真那の両脚に手が掛かる。

脚を大きく開かれ、濡れそぼった秘部が晒された。

「ここ、びくびくしていますね、まだ食べ足りないということでしょうか」

浅ましい姿を見られているのだ。

どこに視線が注がれているのかを悟り、真那の身体がびくんと跳ねる。

「……っ……あ……あの……」

真那は両脚を掴まれたまま、身じろぎする。

身体中が熱くなってきた。時生に見られることにも、恥ずかしいことを言われるのにもこの一週

間で慣れたはずなのに……

「ぐしょぐしょです、ほら」

言いながら時生が、先ほどまで肉杭を食んでいた秘裂に、ずぶりと指を沈めた。

「ん、あっ！」

両手を戒められたまま、真那は腰を浮かせる。視界を奪われているので、時生がなにをしようとしているのかわからなかった。

「あ……だ、駄目……汚れる、指……」

「これだけ濡れていれば、そうでしょうね」

一度指が抜かれ、二本が増える。真那のそこは、ぐちゅぐちゅと淫らな音を立てて、二本の指を呑み込んだ。

「い、いや……ああ……っ」

時生の指が、熱く火照った浮壁を擦る。指との摩擦で、真那の下腹部がひくひくと波打った。

「あ、貴方、なに……あ、ああんっ」

擦られるたびに、とろりと熱いものが溢れてくる。

「ひ、ん、ああんっ、駄目、駄目よ、指、ん、くっ」

胸の上で結束された両掌をぎゅっと握り、真那は身を縮める。

「だ、駄目……指になんか反応したら……あ……」

真那は、甘い喘ぎ声を堪えて懸命に口をつぐむ。

身体は本能的に、体内に押し入ってくる指をぎゅうぎゅうと締め付けた。

抜き差ししたびに、耐えがたいほどに恥ずかしい音がする。

「ん、ああああっ、そこ、擦らないで、っ、あ！」

お腹の側の粘膜を、指で、ひときわ強く擦られた。

「さらさらしてる……不思議な感触ですね。どこを触ってもびくびく震えて、本当に可愛らしい身体だ」

晒された乳房の頂点が、強い快感に収縮し、硬く勃起上がる。

「あ、嫌……指で、あう」

手を胸の上で組まされて、胎児のように丸まったまま、真那はひたすら指の悪戯に耐えた。吐き出す息が、火で炙られたように熱くなってきた。

「嫌……？　そうかな。お身体とお口では意見の相違があるようですね」

合わさっていた時生の二本の指が、狭い蜜路をこじ開けるように開かれた。

「ん、うっ」

アイマスクに隠された目を、真那はぎゅっと閉じる。

腰をくねらせた反動で、蜜口から、どつと熱い雫が溢れ出した。

「指が食いちぎられそうです。葛城家のお嬢様だった貴女が、こんないやらしい身体をしていたなんて知りませんでした」

「い、いや、そんなこと言わないで……あ、ああ！」

真那の抗議を封じるように、時生の親指が膨らんだ花芽をぎゅっと潰し、指がねつとりと前後に行き来する。

痺れに似た強すぎる疼きに、真那は足の指でシーツを掴んだ。

「あああつ、嫌、これ、い、い……や……」

指を咥え込んだ場所が、はくはくと開閉する。

心と裏腹に、身体は『もつと気持ちよくして』と素直にねだっているのだ。

——ゆ、指、指は嫌……

真那は自由を奪われた状態で、四肢を強ばらせた。

「ん、や、だめえ……っ、あんっ、あ、っ」

「だめ……？　俺は続きもしたいんですけど。貴女は違うんですか？」

「あ、あ、違わな……っ、あー！」

真那の下腹が、刺激に耐えかねてひくんと波打つ。

目の前が赤くなってくる。真那の膣内が、ぎゅうぎゅうと収斂した。花鬘が多量の蜜をこぼして、呑み込んだ指に絡みつく。

「ひ、あ……ああ……」

情けなくも、甘えたような声が漏れた。あまりの快感にのけぞると、口の端からひとしずくの涎が伝い落ちてゆく。

「あ……はあ……っ……」

汗ばんだ肌を火照らせ、真那は身体中をぐにやりと弛緩させた。びくびくとのたうつ隘路から、時生の指が無情に引き抜かれる。

熱い液体が垂れて、幾筋もシーツに広がっていく。

「ずいぶん美味しそうに食っていましたが……貴女は俺の指のほうが好きなのかな」  
からかうような言葉に、真那は唇を囁む。

同時に時生の身体がのし掛かっていた。

——ああ……時生……

かき乱された思考では、なにも考えられない。かつて愛した、そして今でも愛しい『夫』が、真那の濡れた唇にキスを落とす。そして今でも愛しい『夫』が、真那の濡れた唇にキスを落とす。

果てたばかりの下腹に、勢いを失わない熱楔が触れた。

その昂りの大きさに、真那は息を呑む。

「続きをしてもいいですか？ 奥様」

真那は、操られてでもいるかのように頷く。

挿れてほしい。中に時生の熱を注いでほしい。

声に出せない欲望は、どうやら時生に伝わったようだ。

濡れそぼった秘所に、昂りの先端が押し付けられる。

「く……う……」

蕩けるほどにほぐされた場所は、はしたない蜜音を立てて時生自身を呑み込んだ。

「ああ、また縮まりましたね。一度、指でイッたはずなのに。欲張りなお嬢様だ」

時生が、真那を焦らすように楔をゆっくりと前後させた。

「ああん、あ、はあ……っ……」

指で強引に果てさせられたはずの身体に、ふたたび快樂の火が灯される。

抱きつきたいのに、縛られた手では叶わない。

「真那さんの中、すごく熱いな……」

時生の声も、いつになくうわずっていた。

「もっとゆっくり可愛がって差し上げたいんですが……駄目だ、動きたい、動きますね」

ゆるゆると前後していた肉杭が、不意にずぶりと沈んだ。

「っ、ひあ、っ！」

最奥を激しく突き上げられ、真那は不自由な姿勢でのけぞった。喘ぐ身体が、時生に縋り付きた

いと訴えてくる。けれど、自分では手をほどけない。

「あ、あ、時生……っ、あ……」

律動のたびに高まっていく官能を逃しきれない。

杭が行き来するごとに、食欲に蜜が溢れて抑えられなかった。

時生が真那の痩せた腰に手を添え、癡猛な、打ち付けるような抽送を繰り返す。

「ん、ふ、あう……っ、あ、ああんっ」

真那の中が、くちゅくちゅと激しい蜜音を立てる。激しい動きに、結合部からしたり落ちた雫

がシートにしみを広げていく。

時生が大きく息をついて、真那の顔からアイマスクを剥ぎ取った。不意に視界が明るくなると同

時に、胸の前で組まされていた手首の戒めも外された。

視界に映った時生の目は、真那しか見ていなかった。快楽に吞まれる寸前の艶めかしい表情に、真那の隘路がひときわ強く疼いた。

「真那さん」

時生が掠れた声で真那を呼び、汗ばんだ身体を強く抱きしめた。

その抱擁の意味もわからぬまま、真那は無我夢中で時生の背中にしがみつく。時生を愛している。そして、身体だけは多分、時生に愛されている。

「あ、ああ、つ、時生……っ」

めちやくちな勢いで突き上げられ、揺すぶられながら、必死で手足を絡みつかせた。

強く抱き合っているせいで、乳房が胸板に潰されて苦しいくらいだ。

真那の目尻から、涙が伝い落ちる。快楽のあまりに流れた、生理的な涙のはず。そのはずだ。

力いっぱい真那をかき抱いていた時生が、小さな声を漏らす。

「……っ……は……っ」

なにも言わずに、時生が接合部を擦り合わせた。

時生の恥骨に潰された花芽から、快感が火花のように散り、身体中に広がる。

真那の隘路が、時生を搾り取るようにぎゅうぎゅうと収縮した。

「時、っ……ああ、ああ……っ」

身体中を震わせた真那の淫奥に、多量の熱液が吐き出される。真っ白な欲望に、真那のお腹の奥が染め上げられていく。

執拗に、刻み込むように、ドクドクと脈打つ楔が奥へ押し込まれる。

真那の小さなその場所では、注がれた多量の白濁を受け止めきれない。

震える足の間から、濁った欲液がとろりと溢れ出す。

——熱い……焼けそう、お腹の中が……

吐き出された熱に淫窟を焼かれながら、真那は目を閉じて必死で息を整えた。

ぐったりと真那にのし掛かった時生が、真那の頭に頬を擦りつける。

まるで愛しい妻にするかのような仕草だ。

しばらく真那に頬ずりしていた時生が、額に、頬に、繰り返しキスをしてくる。こんな風にされたら、愛されていると錯覚してしまうのに……

口づけの雨を降らせていた時生が、満足したようにもう一度、真那を抱きしめた。

「……寝ていいですよ、真那さん」

その声は、いつも通り冷たい。

真那の目尻から、また涙が伝い落ちる。

——時生を傷つけたのは、私だ。三年前の、私……

「どうしてあのか、約束を破ったんですか」

「え……っ？」

唐突で不思議な質問に、真那は薄く目を開ける。だが、頭を時生の肩のところに抱え込まれていて、なにも見えない。

「時生、今、なんて」

「いいえ。お休みください。特に話すことはありません」

時生の汗を身体中で感じながら、真那は涙が滲んだ目を閉じる。

真那にできるのは、時生の怒りと復讐心を受け止めることだけだ。夜ごと抱かれて啼かされても拒むつもりはない。

触れられたい相手は、この世で時生だけだからだ。ある種、病的な潔癖さを持つ真那は、他のどんな男に触られることには耐えられない。それに……

『恋しい相手にしか触れられたくない』

その思いは、真那の立場では、ただのわがままだった。

わがままの果てにすべてを駄目にして、時生まで傷つけてしまったのだ。

——時生、ごめんね……ごめんなさい……

愛しい夫の身体を力の入らない腕で抱きしめ、真那はそのまま眠りについた。

## 第一章

葛城真那、二十三歳。

家族はなく、一人暮らしだ。

夕方の空はもう暗く、吐く息が真っ白くなるほどの寒さで、今にも雪が降りそうである。

——寒いなあ……

帰っても、家は冷え切っている。迎えてくれる家族もないが、自分を叱咤して足を動かし続ける。

真那は、大手メーカー『葛城工業』の創業者一族の長男と、旧財閥の当主一族の長女だった母の間に生まれた。

父系、母系、共に代を遡れば、国内の名家の多くと血縁がある。真那はその『葛城家』の一人娘だった。

両親は一人娘の真那を大切に育ててくれた。

有能で誠実な父と、淑やかで優しい母。

愛し合う両親に守られた、幸せな毎日。

薔薇色の人生だった。だが、両親の死で、真那の人生は変わった。

真那が高校一年生のとき、優しい両親は、車の事故で帰らぬ人となってしまったのだ。

亡き父のあとを継いで社長の座についたのは、父の弟である叔父だ。

だが彼は、重責に耐えられなかった。

叔父は、あつという間に精神のバランスを崩し、近づいてきたろくでなしたちに誘われるままに会社の金に手を出して、三年後に、特別背任罪で逮捕された。

会社が崩壊していく最中、真那の母方の祖父、弾正太一郎は『亡き娘の嫁ぎ先を救うために』と、



孫娘の真那に何度もお見合いを強いた。

祖父は、弾正グループという金融系コングロマリットの総帥だ。

弾正家の傍流の出で、本家の跡取り娘だった祖母の婿として迎えられた。

婿となったあと、身を粉にして弾正家の発展に尽くし、弾正グループのドンとして君臨するようになった。現在は、日本経済界の支配者の一人と言われている。

超一流のビジネスマンである祖父には、充分に葛城工業を救える目算があったのだろう。そのために、孫娘を通じて、葛城家への干渉を強めようと画策していたようだった。

優秀な『操り人形』を真那の夫に据え、間接的に葛城工業の経営を建て直そうと……

だが、間に合わなかった。

男性に対して、過度に潔癖である真那には、『政略結婚』は無理だったのだ。

真那に触れることができるのは、父と、『初恋の人』だけだから……

葛城一族は太一郎の助力を拒み続け、新社長となった叔父の暴走を止めることもできないまま、会社をライバル企業に売却することになった。

先代社長の一人娘だった真那も、父母から受け継いだ葛城工業の株をすべて手放した。

その際に得たお金は、弁護士と会計士に相談の上、母が生前支援していたNGO団体に寄付を。

住み慣れた屋敷や別荘、先祖伝来の調度品、両親の所有していた美術品などもすべて処分し、そのお金も寄付に上乘せした。

財産を手放した理由は、安全のためだ。

政略結婚を拒み続けた以上、祖父の援助は受けられないし、父母の遺してくれた財産は、二十歳の女の子が所持するには危険すぎる大金だったから。

政略結婚を果たせず、葛城工業を救えなかった跡取り娘には、なにも望む資格はないとわかつている。これからは、誰の迷惑にもならないよう、一人で生きていく。

祖父母にはそう宣言し、今ではほぼ絶縁状態だ。

過去を思い出しながら冷え切った足で自宅マンションへ急いでいた真那は、不意に、腕を掴まれた。

突然乱暴に引き留められ、真那は、ぎくりとなって振り返る。

真那を引き留めたのは、背の高い男だった。

黒のコートに、アッシュグレイのマフラーを巻いている。夜を切り取ったような姿だ。佇んでいるだけで様になる、均整の取れた体つき。

引き締まった美貌には、なんの感情も浮かんでいない。見覚えのある男の顔に、真那は絶句した。

「くんばんは、真那さん」

感情のない低い声が、真那の耳朶を打つ。身体中から血の気が引いてゆく。

真那は手を掴まれたまま、背の高いその男を見上げた。

「時生、どうして」

漆黒の目で真那を見据える男の名前は、成瀬時生。真那の実家に勤めていた家政婦の息子。

幼なじみで、初恋の相手で……

そして、かつて真那が手ひどく突き放して、深く傷つけた人だった。

——どうして私に会いに来たの？ アメリカにいるはずなのに……

呆然とする真那に、時生がゆっくり歩み寄ってくる。

三年前よりも逞しさを増した姿に威圧され、真那は、じり、と後ずさった。

「お久しぶりです」

落ち着き払った口調に、真那は我に返る。

「え、ええ……久しぶり、いつ日本に？」

「三ヶ月ほど前に戻りました。真那さんはお仕事帰りですか？」

時生が薄い唇を開く。ひどく他人行儀な口調だった。

少なくとも、真那の記憶にある優しい声ではない。

放心状態で立ち尽くす真那に、時生が感情のない声音で続けた。

「ずいぶん、みすぼらしいお姿ですね」

時生の言うとおりだ。

かつての真那は、日本でも指折りの富豪の娘として、すべてにおいて満たされた暮らしをしていた。けれど、今は……

政略結婚を果たせず、祖父の期待を裏切った真那は、贅沢する資格はない。

だから、ただひたすら彷徨って、そのうちいつか、朝露のように消えられればいいと思っていた。

「なにをなさっているんですか。上流階級の男に嫁ぐ予定だったのでは？」

憎悪に満ちた時生の声に、真那は唇を噛んだ。

三年前の別れの日、真那がついた『嘘』は、いまだに時生の胸に残っているとわかったからだ。

……あのとときの真那には、時生に嫌われる必要があった。幼い頃からずっと時生だけが好きで、その恋心を、後見人である祖父に知られてしまったからだ。

『成瀬め、使用人の息子の分際で、私の孫娘をたぶらかしおったな。真那、お前もお前だ！ あんな生まれの悪い男に近づくのは金輪際許さんぞ』

祖父の厳しい声が真那の心に蘇る。

両親の死の直後、時生は、二人の中を誤解し、怒り狂った祖父の手によってひどい圧力を掛けられた。時生は、兄代わりとして真那を守ろうとしてくれただけ。ただ一方的に、真那が時生を慕っていただけなのに。

ちやうど大学を卒業する歳だった時生は、祖父の手回しで国内での新卒就職の道を閉ざされ、アメリカに発たざるを得なかったのだ。

だから、真那は、葛城家が崩壊したとき、居住中のアメリカから駆けつけ、助けの手を差し伸べてくれた時生を突き放した。

『もう助けにこないで、お祖父様が、また貴方にひどいことをするのが怖い』

真那はそう思い、時生を振り切ると決めたのだ。

時生のように誠実な人間と断絶するためには、その人間にふさわしくない『卑怯者』になり見切りを付けられるのが、一番効果的だ。

だから真那は、あのときわざと、取り返しが付かないくらいに時生を傷つけた。

「貴女は、使用人の息子風情が勘違いするなと俺に言いましたよね？」

凍てつくような時生の声に、真那は頷く。

「ええ、そう言ったわ」

真那は時生に悟られないよう歯を食いしばり、低い声で続けた。

「時生も知つての通り、私は世間知らずでしょう。お相手をえり好みしすぎて、結局縁談は決まらなかつたの。その挙げ句に、お祖父様に反抗して、見捨てられて、この有様よ」

この言い訳で、賢い時生を誤魔化せるだろうか。

真那は懸命に無表情を保ったまま、時生に尋ねた。

「それで、どうしたの？ 私を笑いにわざわざ来たの？」

「ええ、そうですよ。貴女が片田舎のウィークリーマンションで一人暮らししていると聞いて、俺を振ったお嬢様が今、どんな顔をなさっているのか見にきました」

時生の形のよい唇が歪んだ。

記憶の中の時生の声とまるで違う。氷のような声だ。ひと言ひと言が、いつの間にか降り始めた重い雪の礫と共に真那に打ち付けられる。

——動揺した顔を見せては駄目。

真那は湿った髪を、冷え切った手でかき上げた。

「明日も仕事だから帰るわ、ごきげんよう」

だが、振り切ろうとした真那の腕は、もう一度大きな腕に掴まれ、引き留められた。

「放して」

「いいえ」

時生の腕は緩まない。真那を見下ろす目は、叩きつけるばた雪より冷たくて、反抗する言葉が喉の奥で溶けていく。

「真那さんは今、フリーの翻訳家として細々と収入を得つつ、財産を処分した際の残金を切り崩しながら生活しているんですね？」

なぜ時生は、真那の今の仕事まで知っているのだろうか。

真那は素早く視線を走らせ、時生の服装を確認する。

上質な仕立てのコートだ。スラックスの生地も、雪に濡らすには惜しいような品に見える。

かつての真那が見慣れた『裕福な男性』の装いだっただった。

——多分、興信所を使ったのね。でも、なぜ今更、私のことを調べたんだろう。

湧き上がる疑問を一旦胸に納め、真那は冷え切った唇を開いた。

「そうよ。今は経験を積んでいる最中なの」

「へえ、それが真那さんの今の夢なんですね。財産まで捨てる必要があったんですか？ 二度と上流階級に戻らないと言わんばかりのお振る舞いですが、なぜそこまで？」

「だから、言ったでしょう。世間知らずだったから、あのときはこれでいいと思ったのよ。失敗したと気付いたときには遅かっただけ」

自嘲するように真那は答えた。

「それで、真那さんは行き当たりばったりに生きてきて、今に至ると？」

真那は唇を噛み、頷いた。

「ええ。そうよ。貴方こそ、今更なぜ私に会いに来たの？」

真那の問いに、時生が短くため息をつく。整いすぎた顔からは、なんの感情も読み取れない。冷たい面持ちでなにかを考えていた時生が、意を決したように唇を開いた。

「あのメールを送ってきたのは、真那さんですか？」

「メール……？」

時生の連絡先は、三年前から知らない。

真那の怪訝な表情に納得がいったのか、時生は首を横に振った。

「『まなをむかえにいつてください』って書いてあったんですよ。誰が送りつけてきたんだろう」

時生の言葉に、真那は眉根を寄せた。

「私を迎えに？ そんなことを貴方に頼む人がいるとは思えないのだけど」

「俺もそう思います。ですが、悪戯に乗せられるのも面白いかなと思ったので」

時生の薄い唇に、ほのかな笑みが浮かんだ。

「あんな風に切り捨てられた『番犬』が、また『お嬢様』を迎えに行ったらどうなるか、確かめたくなったんです。貴女に嫌がられるのか、軽蔑されるのか」

真那の腕を掴む手に力がこもった。黒い瞳に浮かぶ冷たい光が、強さを増す。

「三年前は、本気で真那さんを助けたかった。俺も純情でしたから」

冗談めかしているけれど、血の滲むような声だった。

「一緒に来てほしかったんです、アメリカに」

時生はあのとき、政略結婚を強いられている真那を守りたい。祖父の怒りを買ってもいいから、駆け落ちのフリをしてどこかに逃げよう、と言ってくれたのだ。それなのに……

「ごめんささ」

うわずった声で、真那は謝罪を口にする。だが時生は答えてくれない。

「もちろん謝罪だけですむとは思っていないわ。だけど、貴方はここになにをしに来たの？ お祖父様に見捨てられた私を見て、溜飲を下げるため？」

「まさか。そこまで嫌な男じゃないですよ。もう少し前向きな理由で来たんです」

「そ、そうだとしても、どうして……急に……」

時生の低い声が、不意に、表現できない歪みを帯びた。

「真那さんは今、なにを考えていますか？ 使用人の息子に付きまとわれて怖い、とか？ だから、そんなに震えていらつしやるんですか」

「ち、ちが……」

「……結婚していないのは、どうしてですか？ 俺以外の男にご自分を高く売りつけるのではなくったんですか？」

「あ、あの……それは……」

「どんな男ならよかったです？ 金持ち？ 品がある？ 生まれがいい？ 教えてくださいよ、俺が貴女に踏みにじられて、選んでもらえなかった理由を」

「ど、どれも、違う……から……」

皮肉で言われているとわかるのに、異性の話を持ち出された嫌悪で、真那の身体がますます震え出す。

愛してもいない男性と結婚させられることを考えると、こうなのだ。

相手がどんなにいい人で、祖父が選んでくれた間違いない人であっても、駄目だ。好きになれない相手に触れられることを思うと、嫌悪と恐怖でなにも考えられなくなる。

専門医のカウンセリングを受けても改善しなくて、医者も匙を投げた。

身をすくませる真那に時生は顔を近づけ、切れ長の黒い瞳で、じつと覗き込む。

「俺が触るのは、まだ平気なんですか？」

あつと思う間もなく、時生の腕が背中に回り、真那の身体をしつかりと捕らえる。嫌悪感はない。されるがままに抱き寄せられ、真那の身体から力が抜けそうになる。

「ああ、平気みたいですね。お気の毒に。この厄介な症状さえなければ、真那さんは今頃どんな男でも選べていたはずなのに」

時生の声が、小暗く歪んだ。

昔から、真那に触ることができ『男性』は時生だけだった。今となっては残酷な事実だ。

深く傷つけた相手だけが、真那の身体に触れることができるなんて。

「さつき俺に謝ってくれたのは本気ですか？」

真那は必死で頷く。一方的に傷つけたのは真那だから、なにも言い訳はできない。だが、傷つけて申し訳なかった、取り返しのつかない非礼を働いたと思っっているのは事実だ。

「本当に、本気で？ じゃあ、俺がなにかをお願いしたら、お詫びにそれを叶えてくれたりしますか？」

「お、お願い……？ それはなに？」

償える方法があるならば、と、真那は縋るような気持ちで顔を上げた。

真那の顔を覗き込む時生の顔には、昔のような優しさも、温もりも、欠片も見当たらなかった。すくむ真那の目をひたと見据えながら、時生がゆっくりと言う。

「俺と結婚してください。……この間、新生葛城グループの取締役になりましたので、それなりの配偶者が必要になりました」

ひときわ強い風が吹き付け、真那の髪を巻き上げる。雪が髪やコートに張り付き、冷気が身体に食い込んだ。

——結婚……？ 私の実家が所有していた会社の、役員に就任……？

ひどく遅れて、時生の言葉が真那の頭に届いた。

「と、時生、なにを」

聞き間違いかと思う真那に、時生は言った。

「三年前に売却された葛城工業は、半年前に再度社長を交代し、経営の更なる立て直しを図ることに

なりました。俺は海外の同業他社でのコンサルティング経験を買われて、葛城工業にヘッドハンティングされたんです。いえ、正しくはあらゆるコネを使って、ヘッドハンティングされるように動きました。面白そうでしたからね、葛城家の元使用人の息子の俺が、あの会社の役員になれるなんて」

真那は呆然としつつ、時生の言葉を反芻した。

葛城家はかつて、閉鎖的な同族経営を貫く会社だった。

しかし、カリスマ経営者だった父が急逝し、叔父が経営に失敗したため、ライバルだった同系統の企業に一旦買い取られた。

それでも統合はうまくいっていないと聞いた。

おそらく、機能不全に陥った葛城工業を立て直すために呼ばれたのが時生なのだろう。

時生はまだ若い、大学時代からベンチャー企業を成功させた手腕の持ち主だ。

アメリカに渡ったあとは、世界的なコンサルティングファームで、卓越した業績を残したと聞く。アジア人では二人しかいない、二十代でのディレクター就任も果たしたと。

「だけど、あの会社にはまだまだ、葛城の関係者が残っているんですよね。仕事を進める上で、身のない俺の話に耳を貸さない、どうしようもない老害共が」

冷たく怒りに満ちた口調だった。

葛城工業を他者に売るとき、真那は両親から受け継いだ株式のすべてを新会社に譲渡したが、あの会社に残った親族もいる。今でも会社の幹部として勤めているはずだ。排他的で、自分たちを特権階級と見做す態度も変わっていないだろう。

そんな中で、優秀なエリート取締役として迎えられた時生への風当たりは強いに違いない。

「ですから、貴女を手に入れて、俺に足りない『身分』を補強します。貴女は腐っても葛城本家のご令嬢、財産だつてご自分の意思で寄付されただけで、別に落ちぶれたわけではない。上流階級の方々も、いまだに真那さんとの縁談を望んでいる方が多いと伺っています。なにしろ真那さんは、あの弾正太一郎の孫娘ですからね」

言い終えた時生が、薄く笑う。

「俺は自分に箔を付けたいんですよ。それから真那さんがお持ちのコネクションも利用させてほしい。このお上品な世界でも『友人』を作らないといけませんから。それには同じ世界の住人からの招待状が必要だ。真那さんには、その招待状を用意して頂きたい」

次から次へと繰り出される『予想外の話』に、真那は愕然とする。

「そ、そんな理由で、結婚したいなんて」

抗う言葉は弱々しい声にしかならなかった。

「……まあ、どうしても俺との結婚を断るといふなら、諦めます。今後は見合い相手に脚を開いて、頑張ってください」

突然、時生が投げ出すような口調で吐き捨てた。

「い……いやー！」

殴りつけられたような衝撃が走り、弱々しい惨めな叫びが漏れ出す。

愛していない男に触れられるなんて、絶対に嫌だ。

震え続ける真那を見て、時生が笑った。  
自分の言葉が、的確に真那の急所を刺したことがわかったのだろう。獲物を仕留めた狩人のような笑みだった。

『見合い相手に脚を開け』という衝撃の言葉に打ちのめされた真那に、時生が言った。  
「……諦めて、俺と結婚してください。さる気になりました？」

かたかた揺れ続ける手を上げ、真那は額を押さえる。  
駄目だ。この状態ではなにも考えられない。

血の気が引いた真那に、時生は優しい笑顔で告げた。

「別に逃げても構いません、追いかけてこも楽しそうですね。ただし俺はしつこいですよ」  
愕然として真那は時生の顔を見上げる。

時生が空いていた片手で、真那の髪を優しく梳く。

傍目から見たら、周りの視線も忘れて寄り添う恋人同士のように見えただろう。

歯の根が合わないくらい震え続ける真那を見て、時生が笑った。

「もう一度聞きます。お見合い結婚をして、夫になった男に犯されるのはお嫌なんですね？」

すっかり血の気の失せた顔で、真那は素直に頷いた。どうしても嫌だ、それだけは。他になにも考えられない。

「じゃあ、交渉成立です。行きましょう」

時生が、真那の手から鞆を奪い、もう片方の手で腕を掴んだまま歩き出す。

真那はよろめく足取りで、時生のあとを付いて歩き出した。

隙を見て真那の弱みを的確に突き、脅して、正常な思考を奪った手腕は、冷酷で見事だった。昔の優しい時生と同じ人間には思えない。

——私が貴方を傷つけたせいなの……？

その問いの答えは、どこからも得られそうになかった。

## 第二章

葛城真那、二十歳。

両親はすでに亡く、父が守り立てた会社も、その弟の手によって見事に潰えた。

そして真那は財産も屋敷もすべてを捨てて、再出発しようとしている。

——私は葛城家の後継者にはなれない。だって、政略結婚はできないから。だからこの家の『お嬢様』であることも辞めるわ。

真那はため息をついて、住み慣れた部屋の中を見回す。

がらんとした、なにもない。今日は、引っ越したばかりの新居から、売りに出す実家の最終チェックにやってきたのだ。

両親が愛用していた小物だけは処分せず手元に残した。換金する予定はない。ジュエリーや万年

筆、時計など場所を取らない品物だけ思い出として持っていく、普段から使おうと思う。

真那はため息と共に自分の姿を見下ろす。

グレーのニットに、黒のパンツ。他の服も、喪に服しているようなそでないような、無彩色の服ばかりだ。灰色が一番、真那の心にふさわしい。きつと一生、この色を纏って生きるだろう。

量販店で購入した無地の服を着た真那を見て『数十億の財産を手放したばかりの、元お嬢様』だと思ふ人はいないに違いない。

このまま誰からも顧みられずに消えていくのが、今の真那の望みだった。

亡き両親は『男性への嫌悪感を抑えられない』と悩む真那の意思を尊重してくれた。

父は、祖父の代で傾きかけた葛城工業を立て直したカリスマ経営者で、父が社長の座にいる限りは、経営はまず安定するだろうと見做されていた。

見合い結婚だった両親は心から愛し合っていて、真那の幸せを願ってくれる人たちだった。

『……どうしてもお見合いが嫌なら仕方ないわね、貴女は、私そっくりな頑固娘だもの。お母さんは真那が本当に好きな人に出会えるように応援するわ』

親族から真那の婚約をせっつかけても、母は、いつも盾になって庇ってくれた。

父も『娘の気持ちを優先してあげたいし、大きくなれば自分で相手を見つかるだろうから』と、母同様に真那を守ってくれた。

けれど幸せな日々は、両親の死と共に終わった。父の弟には、葛城工業を支える力がなかったのだ。

だから、跡継ぎ娘の真那は、早急に『政略結婚のための道具』にならねばならなかった。

母方の祖父、弾正太郎の支援を受けるため。祖父が目星を付けた『優秀な男』を夫に迎え、葛城工業の新たな経営者となってもらうため。

同族経営を絶対に譲らない葛城工業に、稀代の辣腕と呼ばれた弾正太郎の力を取り込むために。それなのに……

——私は、弾正のお祖父様の言いつけに背きました。葛城家の後継者として、なんの役にも立てませんでした。許してください、お父様、お母様。

真那は顔を上げ、生まれ育った屋敷の玄関扉を開いた。目の前に、素晴らしい庭が広がる。

葛城家の庭は昔から美しいことで有名で、父母は知人や親戚を呼んでよく園遊会を開いていた。

真那がこの庭に戻る日は二度と来ない。どうか次の買い手が、父母の愛した庭園を美しく保ってくれますようにと心の中で祈ったとき……

「真那さん」

懐かしい声が聞こえた。視線の先に、門から入ってきたとおぼしき青年の姿が映る。

「時生……」

真那は思わず足を止めた。なぜ、彼がここにいるのだろうか、日本にはいないはずなのに。

目を丸くした真那に歩み寄り、時生は言った。

「よかった、間に合って」

久しぶりに目にした姿に、どうしようもなく胸が騒ぎ始める。



「お、驚いたわ。貴方はアメリカにいたんじゃないの」

真那の問いに、時生が昔と変わらない静かな声で答えた。

「一時帰国したんです、休みを取って」

時生が切れ長の目を細める。

艶のある漆黒の瞳に見つめられ、真那は動けなくなる。引き締まった輪郭もまっすぐに伸びた背中も、最後に見たときより、男らしく力強く見えた。

成瀬時生は、真那より六つ年上の幼なじみだ。

長年真那の実家で働いていた家政婦、成瀬康子のひとり息子で、夫の浮気で独り身となった彼女に、女手一つで育てられていた。

幼い頃の時生は、台所の隅で母を待ちながら、勉強をしていた。

大きくなってからも、母の康子から力仕事に駆り出されて、よく葛城の屋敷に顔を出してくれたものだ。だから、真那とも頻繁に顔を合わせた。

真那の父は、時生に目を掛けていた。

もしも父が生きていたら、時生を葛城工業の重役候補として迎えたがったかもしれない。

『真那は、時生君をお嬢さんに迎えたいのか？』

父のからかい半分の言葉に真那は、真っ赤になったものだ。

恐らく両親は感じていたのだろう。異性に対しての娘の病的な狭量さでは、幼なじみの時生しか受け入れられないのだ、ということ……

——親だもの、気付くよね……

ほろ苦い気持ちで、真那は父の笑顔を思い返した。

——私も、いつか、時生のお嬢さんになれたらいいなあって思っていたわ。時生も私を好きになってくれたらいいなって……本当に、子供だったな。

懐かしい。今となっては、なにもかもが遠い夢の話だ。

「母に真那さんのことを聞いて、すっ飛んできました。旦那様の弟さんが捕まったって聞いて」  
多忙な時生は、休みを取るのだったで大変だったろうに。

時生がどれほど真那を案じていたか、痛いくらいに伝わってきた。

昔からそうだ。時生は、『母の雇い主の娘』に過ぎない真那を、とても大事にしてくれた。真那のうぬぼれでなければ、本物の妹同然に思っていてくれたはずだ。

「こんなことになってるなら、メールで教えてくれればよかったのに」

——連絡なんてできるわけがない。貴方は心配して駆けつけてくれるもの。

真那の脳裏に、祖父の顔が浮かぶ。

『お前をたぶらかした男を私が許すと思うか。娘夫婦はあの成瀬とやらを可愛がっていたのかも知れないが、もう状況は変わった。真那、お前は私の指示に従いなさい』

胸に、一筋の冷や汗が伝った。

時生が大学を出たばかりの頃、祖父が彼をどんな目にあわせたのかを思い出したからだ。

日本での就職をことごとく邪魔され、排除され、彼は新天地を求めてアメリカに旅立たざるを得

なかった。真那のせいで、時生は人生を狂わされてしまったのだ。

「ごめんなさい。一人で大丈夫だから、私」

無意識に顔を背けた真那の手首が、不意に握られた。

「そうですか？ 俺にはそうは思えない」

——時生……そうよね、貴方は覚えておらずだわ。私がどんなにお見合いを嫌がっていたか……貴方に心配してもらえて、私は本当に幸せ者だわ。

目頭が熱くなる。真那にとつて時生は、物心ついたときから憧れの人だった。

母親を支え、苦学しながらも、澄み切った水のように綺麗な空気を纏った、年上の男の子。

名家の令嬢として贅沢に育てられた世間知らずの真那にも優しく、『お嬢様と使用人の息子』という関係だからと卑屈になることもなかった。

いつもまっすぐに背を伸ばして、自分のすべきことを見据えているような、大人びた時生。

真那の目には、時生は神様から素晴らしい『ギフト』をもらった人間に見えた。

時生に対する真那の評価は今でも変わらない。彼は素晴らしい人だ。生まれも立場も時生の本質には関係ない。お見合いで、どんな名家のエリート御曹司に引き合わされても、真那には『時生が一番いい』としか思えなかったのだ。

吸い寄せられるように時生を見つめていた真那は、慌てて、視線をもぎ離れた。

「時生は、自分のために時間を使って。心配してくれてありがとう」

二人の間に、沈黙が満ちた。握られた手首がひどく熱く感じる。

時生以外の男性は全部駄目なんて、真那の個人的な事情に過ぎない。

儂い初恋は、今日で終わらせる。時生には明るい未来に旅立つてもらおう。ただ真那に親切にただだけで、嫌がらせされて苦しむような、理不尽な思いはもうさせない。

「真那さんは、これからどうするつもりなんですか」

時生から目を逸らしたまま、真那は小さな声で答えた。

「叔父様の件で、騒動になってしまったでしょう。だから今後は、どこか遠くで暮らすつもり。家のことは、弁護士さんたちに一通り対応してもらったから大丈夫。私のお金もふさわしい団体に寄付したわ。身軽になったから……私は大丈夫よ」

不安なときこそ、大丈夫だと繰り返してしまうものだ。違和感を覚えたのか、時生がかすかに眉根を寄せる。

「真那さん、大学はどうされたんですか？」

「辞めたわ。自分で勉強するからいいの。こんなことになってしまって、周囲から好奇の目で見られて、通いづらいし」

そう答えたとき、真那の胸はかすかに痛んだ。本当はもっと勉強して父の跡を継ぎたかった。そのときに、隣に時生がいてくれたらいいな、と夢見ていた。

未練は判断を鈍らせる。もう時生の前から去ろうと心を決めた瞬間、彼が口を開いた。

「あの……真那さん……」

思いつめたような口調に、真那は思わず目を開き時生を見上げる。

いつも落ち着き払っている時生の声は、わずかにうわずっていた。

「俺が就職したあと、母も無事に再婚しました。あとは、真那さんだけです。俺の力では、昔と同じようには無理ですが、……俺を頼ってもらえませんか？」

恋しい相手の優しい言葉に、真那の胸が疼いた。時生がこんなことを言い出した理由は薄々察しが付く。

亡き両親は、シングルマザーで苦労していた時生の母を助け、屋敷の家政婦として雇い、時生のことも大学に通えるよう支援していた。

時生にとつては、真那の両親は恩人なのだ。だから彼は、そのお返しに真那を助けてくれようとしているに違いない。

——お父様とお母様はもういない。私のことなんて無視しても、誰も貴方を責めないのに……お祖父様だって、あんなに貴方にひどいことを言ったのに。孫に近づくなどか、お父様とお母様のお葬式に來ないでくれ、とか……

優しくてまっすぐで、えもいわれぬ情熱を湛えた目だ。

涙が滲みそうになり、真那は無言で首を振る。

「気持ちだけで充分よ、ありがとう。具体的にお願いできることはないから、あとの自分の始末は自分で付けます」

「い、いや、そうではなく……あの……」

整いすぎた顔をかすかに赤く染め、時生がやや途切れがちな口調で言った。

「俺と結婚、か……形だけでもいいので、結婚して、一緒にアメリカに來てください。貴女はずっと俺が守りたい」

勇気を振り絞ったのだろう。

時生の口調は、いつになくぎこちなかった。

朴訥な言葉に、真那の身体がふわりと温かくなる。

好きだった人に守りたいと言われて、嬉しかった。泣きたいくらいに嬉しい。

だが、時生は、もう真那の嵌まった泥沼に関わらなくていい。

せつかくこれまで未来を切り開こうと頑張ってきたのだから、そのまま明るい場所に行つてほしいと思つている。

迷惑を掛けるのが怖い。足手まといには、なりたくない。

「行かないわ」

真那はきつぱり首を振った。だが、時生は諦めなかった。

「俺は昔から貴女が大事なんです。だから守ります。一緒に来てほしい」

真摯な声音に、真那の視界がぐにやりと歪んだ。

五つも年下の、妹も同然の幼なじみ。そして、恩人の娘。

愛されてはいなくても、信じられないほど大切にしてもらえる。だからこそ、縋つてはいけないのだと改めて実感した。

——泣くな。

自分にそう言い聞かせ、真那はもう一度首を振る。

「ありがとう。でも私、一人で大丈夫だから」

他人行儀過ぎる真那の答えに、時生が怯んだように口をつぐむ。

当たり前だ。本来は、誠実な相手に対してこんなそつけない態度を取るべきではない。

泣きたい気持ちに誤魔化そうと、真那は庭の花々に目をやる。

色とりどりの花が、甘い香りを振りまいていた。持ち主の人生は大きく変わったのに、庭は昔のままだ。

かつてはこの庭で、優しい両親が微笑んでいた。真那は、康子に駆り出された時生と二人、庭の手入れを手伝ったものだ。

草むしりの途中、飛び出してきた虫に悲鳴を上げて、時生に笑われた。手伝いを終えたあと、母が入れてくれたアイステイヤーは、世界で一番美味しかった……

完璧な幸福に彩られた世界は、遠い過去。

どんなに戻りたくても、もう戻れない。

真那は悟られないよう歯を食いしばり、顔を上げて、緊張の面持ちを浮かべる時生に告げた。

「じゃあ時生、元気でね」

これで時生が引き下がってくればいい。どうか、わかりましたと答えて、真那を置いて去ってほしい。これ以上ひどいことを言いたくない。

だが、真那の必死な祈りと裏腹に、時生は首を横に振った。

「待つてください。俺は一人で行かせるのは嫌だ」

去ろうとする真那の身体を、時生が乱暴に抱き寄せる。

子供の頃、ふざけて抱きついて以来だ。

しなやかで力強い男の身体の感触を初めて知って、真那は激しく動揺した。

「真那さんのことを本当に助けたいんです」

まっすぐな言葉が胸をえぐる。

時生に抱かれた真那の目から、ぼとりと涙が落ちた。

——泣くな……人前で……

必死に言い聞かせても止まらない。真那は、掌の皮が爪で破れるくらいに、強く拳を握った。

「俺とアメリカに行きましょう。お願いです、真那さん。いくら貴女がしっかり者でも、こんな状況の貴女を一人にできない。俺が絶対に色々なことから守ります、だから……」

時生の心配は当然のことだ。

真那はまだ二十歳。時生に心配されているとおおり、お嬢様育ちで世間の恐ろしさを知らず、父母が授けてくれた知恵以外に身を守る術を持ち合わせていない。

真那は掌の痛みを確かめながら、乱れた息を整える。時生がそこまで思ってくれて、とても嬉しいし幸せだ。

だから、その尊く誠実な愛情は、この先、別の人に捧げてほしい。なんにもできないお嬢様のために、権力者の怒りを買う必要はないのだ。

「あ、あの、わ、私……私……」

潰されていく心が小さな悲鳴を上げる。

——アメリカから駆けつけてくれてありがとう、時生と一緒に行きたい。湧き上がった本音を呑み込み、真那は力を込めて、ぐいと時生を押しつけた。

『今すぐに時生に軽蔑され、嫌われろ』

萎えそうな心を奮い立たせ、自分自身にそう命令する。

時生を自分の人生から切り離すのだ。

祖父に、彼の人生を潰させてはいけない。彼だけは、守らなくては……

そう思いながら、真那は震える唇を開く。

「私、したくもない結婚をするなら、せめて葛城家と同じ階級の人がいいの。だから、その提案はお受けできないわ」

腫れぼったい目や、涙の伝った頬を誤魔化す余裕はない。

庭を満たす甘い花の香りを残酷に感じた。心は裂かれて血を流しているのに、この庭は夢のように美しくて優しい。まるで自分だけが天国から追い出されたようだ。

凍りついた時生に、真那は矢継ぎ早にまくし立てる。

「どうして驚くの？ 当たり前でしょう？ 貴方と結婚するほど落ちぶれていないわ。同情してくれてありがとう」

真那は濡れた顔で時生を見上げ、うわずった声で言った。

「だけど勘違いしないで。私、使用人の息子の妻なんて絶対にお断りよ」

心が完全に折れる前に、時生と自分の人生を切り離さなくては。

「真那……さん……」

「遠路はるばる来てもらったのにごめんさい。じゃあ、さようなら。康子さんによろしくね」

真那は涙を隠すために、急いで時生に背を向ける。

引き留める声はもう聞こえない。真那も、二度と背後を振り返らなかった。

——大丈夫、これでもう、時生は私を忘れる……

一歩歩くごとに、心が軋んでバラバラになっていくようだ。

心の中から、人間らしい感情が少しずつ腐って剥がれ落ちていく。

——さようなら、本当にありがとう。どうか、幸せに……

足早に歩み去る真那を、時生は追ってこなかった。

どうやら、ソファに腰掛けたままうたた寝していたようだ。静まりかえった部屋の中で、真那は目を覚ました。

——嫌な夢……見たな……

頭が一瞬痛み、真那は顔をしかめる。

何度、あの一瞬をやり直せたらと願っただろう。

『迷惑を掛けるけれど、時生と離れたくない』と素直に泣いて頼めばよかつたのだろうか。けれど、若い二人で祖父から逃げて果たして上手くいったのか……

一つわかるのは、今より世間知らずだった真那を抱え、時生は大変な苦勞をしただろうな、ということだけだ。

だが、あの日から状況は大きく変わった。

三年前よりはるかに出世した時生は、彈正太一郎の孫娘であり、葛城本家の血を引く唯一の『令嬢』がほしいと言いだしたのだ。

成り上がりの自分に必要だからだと。

——たしかに、私にはまだ、亡くなった両親のお友達や、社交界へのコネクションがある。お父様の母方の従兄は、今、都銀の頭取をなさっているし、もう一人の従妹は欧州の大使夫人で。その気になればいくらでも、時生と『上流階級』の人たちを繋ぐことができるわ。でも……

真那は頭を押さえたまま、ゆっくりと立ち上がった。

手足の先がひどく冷たいが、部屋の中は暖かい。横たわっているのは広いベッドだ。

ホテルのエグゼクティブフロアだろうか。そこまで考えて、真那は我に返った。

ここは時生の家だ。駅で車に乗せられ、ここに連れてこられた。

真那はこれまでの経緯を思い出し、乱れた髪や着崩れた衣服を整える。

コートは壁に掛かっている。周囲はとても静かだ。

——無駄に逆らうより、体力を温存しようと思つて休憩したんだっけ。なにもしないつてわざわざ

ざ言うくらいだから、本当になにもしないのだろうか。……男の人相手に逆らつても、力で勝ち目なんてないものね。

真那はコートを着込み、床に置いてあつたバッグを手に取る。財布はある。スマートフォンも弄られた様子はない。

身支度を整え、真那は部屋を出た。廊下に人気はない。確か玄関は左手のほうだつたと思つたとき、少し先の扉が開いて、時生が顔を出した。

白いシャツ一枚の軽装だ。そういえば、この家の中は完璧に暖房が効いている。

立ち尽くす真那に、時生が落ち着いた声で言つた。

「疲れが取れましたか。では、こちらへ」

「なんのために私をここへ？」

表情を変えることなく尋ねた真那に、時生が無表情に繰り返す。

「こちらへ来てください。話があるので」

どうやら振り切るのは難しそうだ。真那は素直に彼の言葉に従つた。

通されたのは居間のようだ。ざっと目算して、四十畳ほどはある。

かなりの広さだ。同時に、車で連れてこられたとき、最後に降りたインターチェンジが、都心の高級住宅街のそばだったことを思い出す。

——都心に、これだけの広さの家を構えているなんて。本当に成功しているのね。

「飲み物はコーヒーでいいですか？」

時生の問いかけに、真那は無言で首を横に振る。なにも口にしたくない。

「コートを脱いで、ソファに腰掛けてください」

淡々とした時生の声に、真那は諦めてコートを脱ぎ、鞆を足下に置き、言われたとおりに腰掛けた。

「どうぞ」

置かれたコーヒーからは、香ばしい香りがした。真那は手を付けずに、向かいの席に腰を下ろした時生に尋ねる。

「なぜ私をここに連れてきたの」

「申し上げたとおりですが」

半眼になって押し黙る真那の前で、時生が傍らに置いていたクリアファイルから、一枚の書類を取り出した。

「サインしてください」

見慣れない書類だ。左上に大きな字で『婚姻届』とある。

——本気なの？

真那は動揺したことを悟られないよう、冷め切った口調で言う。

「私に無理矢理署名させても、貴方に協力するとは限らないわ」

「ええ、積極的になにかをしてくれとまでは言いません。俺は貴女と結婚したいだけ。それと、子供を産んで頂ければ、なおいいですね」

「ごど……も………?」

真那は己の耳を疑う。

「はい。俺の地位を盤石にするためにお願いします」

戸惑う真那に、時生がいたぶるような声で尋ねる。

「昨日も伺いましたが、お祖父様の決めた御曹司と俺、どっちに犯されるのがいいですか?」

「な………っ………!」

あまりの言葉に飛び上がりそうになる。

こんなことを口にするような人ではなかったのに。

真那の心臓がドクドクと嫌な音を立てる。背中に冷や汗が伝った。

「どちらも嫌なら、まだ我慢できるほうを選んではどうでしょう?」

あざ笑うような冷ややかな笑みに、真那の足が震え出す。

時生はもう、昔の時生ではない。改めてそれを思い知らされ、真那は強く首を横に振る。

「ど、どっちもいやよ………どうしてそんな………」

「まあ、そうかもしれないませんが、どちらか選んで頂くしかありません。どっちにします? 俺にするか、顔も知らない男に犯されるか。さあ選んでください、今この場で」

——か、顔も知らない……

ざあっと音を立てて血の気が引いた。耳にした言葉が脳に届いた刹那、吐き気がして動くことすらできなくなる。青ざめて震える真那の肩に、時生が手を置いた。

「そう、よかった。俺のほうがましなんですわね」  
笑いを含んだ声で問われ、ますます身体が震えた。

——どうして、そんなに嬉しそうな、時生。  
紛れもない喜びを宿した目が恐ろしい。血筋のいい女を利用できることは、そんなにも魅力的なのだろうか。

償うと約束したからには、なんでもするつもりだ。だが、真那の『協力』は時生を本当に幸せにするのだろうか。もう二度と、時生を傷つけたくないのに……

「……少し、考えさせて」

「なにを考えるんです？ 他の男が駄目なんだから、俺にすればいい、そうでしょう？」

反射的に頷きかけて、真那はぎゅっと拳を握った。時生の声が悪魔の囁きのように感じられた。

「ね、真那さん、俺でいいと言ってください」

時生の声が低く甘く真那の肌に絡みつく。真那は吸い寄せられるように時生の顔を見上げた。

「俺はどんなに嫌がられても、貴女が必要だ。だから無理を通して迎えにきたんです。もし、どうしても嫌だというなら、閉じ込めてしまおうかな……ええ、それがいい。そうしましょうか」

突然の言葉に、真那の身体がゾクツと震えた。

「どうしますか？ 『俺は貴女がいい』、貴女は？」

甘く妖しい声に、真那の身体が震えた。

『私も』

飛び出しそうになった言葉を、真那は慌てて抑え込む。

——私、今……私も貴方がいいって、答えそうになった……

（時生 I）

時生が二十歳だった夏のある日。

真那の両親が、屋敷の庭でガーデンパーティーを開いた。

海外からの賓客や政治家も招かれた、目もくらむような豪華な場だ。

葛城家の屋敷は、明治時代に迎賓館として建てられたものである。庭の設計は、今は亡き高名なガーデンデザイナーの手によるもので、周囲を彩る薔薇は葛城家の庭にしか咲いていない、特別な種類も多い。好事家が土下座して株分けをしてくれと頼むような名花ばかりだ。

来客は美しい薔薇を楽しみ、屋敷と庭の素晴らしさを褒め称えながら、極上のシャンパンを片手に笑いさざめいている。

時生は、その煌びやかな会場の片隅で、黒子として控えていた。さっきから一つ気がかりなことがあるからだ。

来客として招かれている名家のご子息の様子がおかしい。昔から時生は、真那に関するセンサーだけは異様に発達している。真那に近づく不届き者は絶対に許さないと心に決めている時生の目に、



「ご息は『警戒対象』として映っていた。

パーティが始まって二時間ほど経った頃、予想どおりの事態が起きた。

——嫌な予感があつたな……

泣きながら逃げてきた真那を背中に庇い、時生は、その来客の息子と対峙していた。

——たしか、旦那様が、このご息子とお見合いを断ったんだっけ。だとしたら、ずいぶん後先考えない振る舞いだな、こんなに泣いているホスト側の令嬢を追い回すなんて。

時生は冷ややかな目で、その若者の姿を確かめる。

同じ二十歳と聞いているが、高級ブランドの腕時計を身につけていて、金のかかった身なりだ。

「どうして逃げるんですか？ 僕の話聞いてほしいと言っただけなのに」

若者は、整った顔に薄笑いを浮かべながら、時生の背中に隠れた真那の顔を覗き込もうとする。儂げな怯える美少女に向けて嗜虐心露わだ。時生は強い嫌悪感を覚え、眉根を寄せた。

——やめてくれ。真那さんは本当に嫌がつているのに。

使用人の立場で、来客と令嬢の会話に立ち入るわけにはいかない。

だが、真那が泣きながら逃げてきたのは異常事態だ。

真那は男性が極度に苦手だが、人前で感情を剥き出しにしたりしない。葛城家の後継者として、幼い頃から振る舞いを躰けられているからだ。

「か、髪に……触らないでください……」

真那が震え声で、若者に抗議した。

「ごめんなさい、あまりに貴女が綺麗だったものだから」

若者の言葉に、時生の背後の真那がますます縮こまる気配がした。

「おい、君は席を外してくれ」

若者が、不機嫌そうに時生に『命令』した。こんな風に見下されるのは慣れている。

時生は使用人の息子だ。上流階級の人の中には、時生に人権があることすら想像できない人間が、たまにいる。

——席を外せ？ できるわけがないだろうが。俺の最優先は真那さんを守ることなんだよ。

心の中で冷ややかに言い返し、時生はそつと真那を振り返った。

「どうなさいました、真那さん？ あちらでお休みになりますか」

青ざめた真那が、細い肩を震わせこくりと頷く。

「おい、あっちに行つてくれと言ってるだろう」

——二十の男が、十四歳の中学生と二人きりでなにを話すんだか。

心の中で下心丸出しの若者をせせら笑い、時生は薄い唇を開く。

「申し訳ありません、お嬢様はちよつとお疲れのようです」

冷淡さの滲む、慇懃な口調にカツとなったのか、若者が乱暴に時生の肩を押しした。

「君は席を外してくれと言つたはずだ！」

「あ……っ……」

華奢な腕を無理矢理引つ張られ、真那が大きな目にふたたび涙を浮かべる。

「い、いや、やめてください、引つ張らないで」

震えながらも気丈に拒否した真那の肩に、若者が馴れ馴れしく手を回す。

「我が一族との縁談は、葛城さんにとつても悪いものではないはずですよ。まだ中学生の真那さんには、きちんと理解して頂いていないみたいですね。僕と仲良くなりませんか？」

若者に無理矢理抱き寄せられた真那は、蒼白そうぱくになって震えている。

「と……時生……助け……」

涙目の真那が細い手を差し伸べ、蚊の鳴くような声で時生に訴えた。

若者の両親は財界の大物だ。真那との縁談はなくなったものの、家同士の付き合いは継続したい、というのが双方の意向だったはずだ。

おそらく『縁談を再開したい』というのは、この御曹司の一存だろう。

理由は多分、真那が美しいから。彼女に個人的な執着を抱いだいているからに違いない。

あまり大騒ぎにならなければいいが……と思いつつ、時生はわざと、生意気に聞こえる口調で、

若者に告げた。

「すみませんが、お嬢様は嫌がってらっしゃいますので」

言いながら、遠慮なく、真那の身体を若者の腕から奪い取る。

これまでは一切本気は出さなかったが、真那の怯おそえようを見ていて限界に近いことを悟り、放っておけなくなった。

予想外の力で押しつけられた若者が、怒りの声を上げる。

「なんなんだ、お前は……！」

若者の罵声ののしりも、計算内だ。時生は、もつと大声を出させようと、あえて生意気な態度を取り続ける。

「大丈夫ですか、真那さん」

若者に背を向け、少し乱れてしまった真那の髪の毛を直した。

次に、若者を無視したまま、真那の冷や汗を自分のハンカチで拭う。真那はほつとしたように、ふたたび時生の陰に隠れた。

「まだ中学生ですよ。そんなにガツつかれたら怖がるに決まってる」

時生の冷淡な言葉に、若者が大きな声で反論しようとした。

「な……ッ！ 失礼な、誰が……！」

そのとき、背後から足音が聞こえてきた。

「真那」

男性の声に、時生の背後に隠れていた真那が弾はじかれたように声を上げる。

「お父様！」

そこに立っていたのは、真那の父、真一しんいちだった。威厳ある長身の紳士の登場に、若者の表情に怯おびえが走る。

この場面を真一に見つかるのは計算外だったのだろう。

「裏庭でなにをしているんだ。お客様がいらっしゃるんだから、ちゃんと表にいなさい」

言いながらも、娘の顔色に気付いたのだろう。真一は真那の額ひたいに触れ、眉をひそめた。「どうした、具合が悪いのか？ ……なにがあつた？」

娘を案じる真一の脇を、先ほど真那に絡んでいた若者が無言で通り抜ける。さつさと姿をくらました若者に、時生は苦笑した。

——さすがに、葛城家のご当主の怒りを買う度胸はないのか。

無言で父娘の様子を見守っていると、真那の様子を確認し終えた真一が顔を上げた。

「時生君、騒ぎにならずに収めてくれてありがとう」

真那の肩を抱いたまま、真一が優しく微笑む。

「今日のゲストには、彼のご両親の知り合いも多い。考えなしに真那を追い回されてどうしようかと思っていたが、まあ、私に一度見つかつたから懲こりるだろう。君がうまく真那を庇かばってくれて助かつた」

娘の長い髪を撫なで、真一が優雅に語りかける。

どうやら、真一は事態を把握はつかくしていて、裏庭に連れ込まれた真那を心配していたようだ。

真一がゲストとの会話を止めて突然駆けつけたら、皆心配して、あるいは好奇心で、自分のあとを追って押しかけると予想したのだろう。

そうなれば、若者が真那にしつこくしている場面を多くの人が見ることになる。

だからこの場を、常に真那の『番犬』を務めている時生に任せつつ、裏庭に來られるタイミングを狙っていたのだ。

「落ち着いたら表において。もう少し我慢できるね、真那」

父の言葉に、真那は素直に頷いた。

「では、私は先に戻っているからね、お茶でも飲んで休憩してきなさい」

時生は一礼して、真一の広い背中を見送る。それから、真那を振り返った。

小さな白い顔には血色が戻り、いつもの愛らしい桃色の頬を取り戻している。

「大丈夫ですか、真那さん」

尋ねると、真那が頬をかすかに染め、頷いた。

「時生が助けてくれたから」

恥はじらうように俯うつむくさまは、まるで咲き初はじめてめた春薔薇はるばらのようだ。

全幅ぜんぷくの信頼を込めた真那の笑みに、時生の心が深い満足を覚えた。

昔から、この年下の女の子が喜んでくれればそれでよかった。

妹のような存在だからなのか、頼られることで自尊心が満たされるからなのか、それは自分でも明確にはわからない。

だが、真那が時生を信用してくれることが嬉しいのだ。

それだけで、なんでもしてあげようと思える。

——当然です、真那さんは俺と母さんの恩人のお嬢様なんだから。

時生は微笑んで真那を見つめた。

卵形の綺麗きれいな輪郭りんかくに、まっすぐなさらさらの黒い髪。

そしてなにより目を惹くのが、まっすぐに凛と伸びた背中。年相応の愛らしさが、滲み出る生来の気品と相まって、真那を真珠のように見せている。

美貌で名高い母親の真那は、道行く人が振り返るほどの美少女だ。

葛城家の掌中の珠として、誰からも大切にされている。

もちろん時生にとつても、真那は主君の大切なお嬢様、だ。幼い頃は、やんちゃな真那に、ボール遊びに虫取り、おんぶに抱っこ、散々付き合わされた。

妹のように大切な存在。それが、時生にとつての真那だ。

葛城夫妻は心の広い人たちで、娘と使用人の子が遊んでいても嫌な顔一つしない。

真那の父、真一は『真那は一人っ子だからね。兄のように真那を大事にしてくれる人がいるのは、親として嬉しいよ。男嫌いのあの子も、珍しく君には懐いているし』と言って、避暑の際など、時生を同行してくれることもある。

『身分違いの子供なのに優遇されすぎている』と陰口をたたかれているのは知っているが、仕方がない。実際に、身に余る厚遇なのだから。

だが、なんと言われようと、時生は葛城家のお嬢様の『番犬』であることをやめない。

時生の母、康子は、浮気性の夫に逃げられ、女手一つで苦勞して幼い時生を育てていた。

困窮し途方に暮れていたところに手を差し伸べてくれたのが、社会福祉やチャリティに強い関心を持つ葛城夫妻だった。

寡婦の支援団体から母の状態を聞いた夫妻は、家で家政婦として働くよう申し出てくれた。

それ以降、母は葛城夫妻に深く感謝し『もともとと尽くして、ご恩を返さなくては』と、仕事に精を出している。

「ちよっとお茶を飲んでから戻ろうかな……」

真那の言葉に、時生は頷いた。

「では、お淹れしますね。居間に参りましょうか」

「ありがとう」

真那は時生の言葉に屈託なく笑って、目の前を歩き出す。

ぴんと張り詰めたような美しい足取りだ。真那は幼い頃からバレエに日舞に、一通り習ってきている。滑るように優雅な歩き方は、一朝一夕に身につくものではない。

大学にもバイト先にも、綺麗な女の子はたくさんいる。

だが、真那のような人間は見たことがない。

『姫君』という言葉がふさわしい少女は、時生の知る限り真那だけだ。

「あ、そうだ。時生に本を貸す約束をしてたわね」

ふと真那が口にしたのは、最近日本でも翻訳され、大ブームを起こした、イギリスのファンタジー小説のタイトルだった。

半月ほど前、イギリス出張していた真一が、愛娘の土産にと原書を買ってきたもののはず。

『俺も興味がある』と口にした時生に、真那が『読み終わったら貸してあげる』と約束してくれたのだ。律儀な彼女は絶対に約束を忘れない。

『約束を忘れるのは、相手を軽んじているのと同じだから気をつけなさい』と両親から躰けられて  
いるせいもあるのだろうが、根が生真面目なのだ。

「もう読み終わったんですか？ 旦那様があの本をくださったのは、ついこの間では？」

英語の小説は、実用書と違って読みにくい。

造語や見慣れない名詞が頻繁に出てくるし、その国の故事を知らないと理解できない表現も多い  
からだ。

「読み終わったわ。日本語版と比べて、何ヶ所か、翻訳時に変えられていた設定があったけど。  
やっぱり小説は、文化的な素養がないと理解できない表現が多いわ。キリスト教の故事なんて、日  
本の義務教育じゃ、なかなか触れないものね。あとで時生も読んでみて」

あっさりと言いつつ真那に、時生は感嘆する。

——あの厚さの英語の本をもう読んだのか。勉強や習い事にも時間が取られるだろうに。さすが、  
真那さんだな……

真那は父親の真一に似た、非常に聡明な少女だ。

都内の難関私立高校に通い、成績はトップクラスをキープし、海外からの賓客が葛城邸を訪れた  
ときも、臆することなく英語でやり取りしている。

真那と接した誰もが、さすがは名家のご令嬢と感嘆する。

だが、素顔の真那は普通の素直で明るい少女だ。時生や母の康子に対しても、高圧的な態度だっ  
たことなど一度もない。いつも品がよく穏やかで、思いやりに溢れている。

まさに本物の『姫君』だ。きっと将来は、淑女のお手本のような女性になるだろう。

——男性が苦手なものも、年頃になれば治るだろうしな。

二十歳になった真那は、どれほど美しいのだろう。社交界の男たちは、こぞつて葛城家の美貌の  
姫君……真那に求婚するに違いない。

どんなによい縁談であっても、真那が怖がるような相手は論外だ。状況の許す限り、時生が真那  
を守らなければ。

だが、もし、真那が笑顔を向ける男性が現れたら、その時は……そこまで考え、胸がかすかに痛  
んだ。

わかっている。身のほどはわきまえているつもりだ。真那にふさわしい相手が現れば、そのと  
き、番犬はお役御免になると。

「どうしたの？」

前を歩いていた真那が、驚いたように振り返る。

やるせなさに沈んでいた時生は、我に返って真那に微笑みかけた。

「いいえ、少しぼうつとしていました。すみません」

返事を聞いて、真那が安心したように微笑む。

——先のことなんて知らない。真那さんがふさわしい相手に会おうまでは、俺が守る。

時生は、心に生じた妙なざわめきを振り切り、そう決意した。

どうやら、家に帰してもらえそうにない。しばらくこの家で寝起きしろということのようだ。真那は諦めて時生の言葉に従うことにした。

——お風呂、使った形跡がなかった。多分、この家、ベッドルームとバスルームがそれぞれ二つ以上あるんだと思う。外国人富裕層向けの物件なのかも。

入浴を終えた真那は、放心したまま、ベッドに腰を下ろす。

バスローブ姿では寒い気もしたが、着替える気力が湧いてこなかった。

結局、婚姻届へのサインは考えさせてくれと言いつ張った。

ひとまずは許してくれたが、次はないだろう。色々なことがありすぎて、頭が働かない。

——家の中では自由にしていて構わない、つて言っていたわね。

寛大な待遇に感心したが、すぐに当たり前だ、と思う。

逃げようがないからだ。今の時生には、おそらく十分な資金があり、真那のことなどいくらでも探せるのだから。

だが、諦めては駄目だ。気力を奮い起こし、真那はその先を考えた。

——こ、子供なんて作れない……。無理よ……。愛し合ってもいないのに……

男性と付き合った経験がないのでわからないが、男性だつて愛情がなければ行為には及べないはずだ。時生はなにを考えているのだろう。

——だけど、時生と結婚したら、一生時生以外の人に触れられずに済む。

不意に滲み出す甘い毒のような誘惑を真那は慌てて振り払う。

真那は気分を変えようと、『自室』として与えられた部屋を見回した。

——広いわ、すごく。

先ほど使用を許可されたバスルームや、居間の広さを思い返す。そして、この辺りの家賃相場を想像し、ため息をついた。

——サラリーマンが住める家じゃないわ……

新生葛城工業の役員としてヘッドハントされたというのは、事実なのだろう。

世界トップクラスのコンサルティングファームで実績を挙げていた時生なら、業務改革のために迎えられることもありえる。

そうでなければ、こんな暮らしは不可能だ。

——そうだ。仕事のメールをチェックしておかなくちゃ。

真那はバッグから小さな軽量ノートパソコンを取り出し、スイッチを入れた。そろそろ次の案件の相談をしたい、と取引先に言われていたことを思い出す。

事務用のメールを確認すると、やはり連絡がきていた。

——通訳さんの補助業務……か。私、今後、自由に外出できるのかな？

やはり時生がなにを考えているか、もう一度確認しなくては。

先ほどの時生の冷淡さを思うと怯んでしまうが、この異常な状況だけは少しでも改善せねばならない。そう思いながらメールを送り終え、真那はノートパソコンを閉じた。

バッグにノートパソコンをしまい終えると同時に、部屋の扉がノックされる。

真那の全身が緊張に強ばった。

「今いですか」

感情の抜け落ちたような時生の声に、真那は反射的に立ち上がり、扉を開けた。

「どうしたの？」

時生と目が合った瞬間、自分のはしたない格好を思い出す。真那はさりげなく胸元に手を当て、肌を晒す部分を少しでも減らそうと振る舞った。

「落ち着いていますね。なにをしに来たのかくらいわかるでしょうに」

真那は眉根を寄せた。

自分の生命線を握る相手に、動じている顔を見せたくない。

——弱気などところを見せては駄目。

気力を振り絞って顔を上げ、真那は無表情に佇む時生に尋ねた。

「なんの用？」

時生は答えない。真那は平静を装ったまま、可能な限り淡々と話を続けた。

「一つ教えて。今後、私に外出の自由はあるのかしら。仕事があるんだけど」

「構いませんよ、どうぞお出かけください」

そこで話は途切れる。

どうせ貴女は逃げられない、と言外に匂わされ、真那は小さく唇を噛んだ。

「ありがとう。助かるわ」

先ほどまで晒されていた雪の冷たさが、まだ身体に残っているかのようだ。

時生とこんな会話しかできなくなつたのは自分のせい。謝る資格すらないほどに、時生を貶めた。だからもう、昔には戻れない。改めてそう実感する。

「……ですが、なにをするにもまず、俺に汚されてからにしてくださいね」

時生の声が、がらりと変わったのは、そのときだった。

「な……っ……」

唐突な時生の言葉に、真那の肩が揺れた。心臓がどくんと重い音を立てる。

「よ、汚されて……って……なにを……っ」

「当たり前でしょう、貴女が俺の知らないところで、どんな人間と繋がっているかわからないんです。所有権は主張させてもらう。自由に行動していいのは、俺のものになってから……です」

足が、身体を支えられないくらい震え出す。未知の世界に突き飛ばされたような衝撃で、震えが止まらない。

「なぜこんなに震えているんです？」

真那は時生の身体を突き放そうとした。だが、まるで力が入らない。

「使用人の子に好きにされるのが、そんなに無念ですか」

「ち……違う……あれは、私が、悪かつ……」

言い訳を口にしかけて、真那は血が出るほどに唇を噛んだ。

時生の尊厳を傷つけたのだ。口先の謝罪で許されるはずがない。

——私にできることは……私に……

必死に顔を背け、真那は考え続ける。心の奥のほうで、諦めの声が聞こえた。

『時生の好きにさせてあげるしかないんじゃない？ だって、私もお祖父様も、そのくらいひどいことをしたんだもの』

それは、間違いない自分の声だ。間違った判断だとわかっているのに、その声が妙に心に響く。

——私にできることは、怒りに任せて踏みこたえられるだけなの？ そんなの悲しすぎる。

唇だけが、最後の抵抗の言葉を絞り出すとする。

「あ、愛がない結婚なんて、間違ってるわ、お願いだから……」

目の前が涙の膜で、ぐにやりと歪む。なにを言っても虚しいと気付く。時生とは、もう心は通わないのだろう。

深く傷つけられた彼には真那の言葉を聞く意思などないし、傷つけた側の真那には、なにを語る権利もないのだ。

「愛がない？ どうしてそう思うんです？」

時生が初めて、楽しげな笑い声を立てた。

大好きだった昔の時生の声だ。過去の幸せだった時間が一気にフラッシュバックする。

花が咲き乱れる葛城家の庭園で、大学生の頃の時生が笑いかけてくる。

その思い出にひびが入って、四散した。

今の時生は、あの頃とは笑い方が違う。真那の知っている彼ではないのだ。

「俺は愛していましたよ、ずっと」

黙って涙をこぼす真那の顎を上向かせ、時生が顔を近づけてくる。

ぞっとするくらい綺麗な顔だ。表情がなくなつた分、顔立ちの端麗さがより際立って見える。

仮面のような美貌に、真那の視線は吸い込まれた。

「今も愛しています」

時生の白い顔が、夜空に浮かぶ月のように見える。なんの感情もない。この愛の言葉だって、ただ文章を読み上げているだけだろう。

「納得できませんか？ では言い方を変えましょう。俺にとつて、貴女は価値がある。どうしても必要だし、他の人間に渡すのも御免だ。これだけ執着しているのですから、愛していると言っても構わないでしょう？ だから、俺のものになってください」

——抱かれれば償いになるの？ 時生はそんなことで満足できるの……？

頬を涙が伝ったのがわかった。

『地位と身体で返せって、はつきり言ってくれるだけまだわ。私とお祖父様は、時生に対してそれだけひどいことをしたのよ』



諦めたような自分の声が心の奥から聞こえる。

真那の身体から力が抜けた。

「嘘つき。愛してるなんて軽々しく口にしたら、いつか罰が当たるんだから」

唇をもぎ離し、真那はそれだけ言った。

「嘘ではありません。愛している、放したくない、ずっと俺のそばにいてもらいたい」

落ち着き払った声で時生が言う。愛の告白にはほど遠い、学校の先生のような形式だった口調で。

「……自己暗示みたい」

「そうかもしれないね」

乱れた真那の髪を指で梳きながら、唇を耳元に近づけてくる。

「では真那さんも、暗示に掛かったふりをしてください。俺の妄言に話を合わせてくれれば、少しは優しくできるかもしれません」

「な、なにを……」

「真那さんは、俺を罵倒したことを後悔していらっしやるんでしょう？」

突然、後悔しても足りない『あの過去』に切り込まれ、真那の身体がびくりと揺れる。

「そのくらいわかります。貴女はとても優しい人ですからね。たとえ本気の言葉であっても、俺を傷つけたこと自体は悔いているはずだ」

——時生……？

身体を震わせる真那の髪を繰り返し梳きながら、時生は優しい声で言った。

「俺は本気で迎えに行ったのに、哀しかった。哀しかった事実は消えませんが、だから一生貴女の謝罪は受けない。言葉はいらないので俺のものになってください。お願いしたいことはそれだけです」

時生の言葉をゆっくり咀嚼する。

理解するごとに、血の気が引いていく。

——一生……謝罪は……受けない……

やはり、彼は自分を憎んでいたのだ。

今、確証を得られた。真那の中に、どぶりと絶望の闇が広がった。

「……わかり……ました……」

枯れ果てた老婆のような声。自分の身体を使って、他人が声を出しているようだ。

真那を抱いたまま、時生がかすかに身体を揺らした。笑っているのだ。だが、その笑い声は泣き声のようにも感じられる。

「物わかりがよくて結構なことだ」

諦めの気持ちで、真那は目を閉じる。

「真那さん、あのベッドに自分で乗って、それを脱いでもらえませんか」

あまりの言葉に、真那の四肢が硬直する。

涙が滲んだ。屈辱なのか恐怖なのかわからないが、喉元まで熱い塊がせり上がってくる。

——初めてだと言っても、時生は、同情なんかしてくれないわね。

バスローブ姿でいるだけで恥ずかしかったが、そんなのは些末なことだった。これから味わわれるのは、更なる羞恥なのだ。

——惨めな顔だけは見せられない……

真那は、気を緩めれば力が抜けそうになる足を踏ん張り、気合いを入れた。「ええ、わかった。貴方の言うとおりにする」

まっすぐに背を伸ばした真那に、時生がおや、という顔をする。真那は彼に背を向け、迷いのない足取りでベッドに向かい、そこに腰を下ろした。

——自分で決めたことだもの。最後まで耐えられる。

時生は、償いの気持ちがあるなら、自分の道具になれと言っているのだ。そして、真那に真の自由は与えない、どこにも逃がさない。

真那はバスローブに手を掛け、かすかに視線を下げた。

今までの人生で一番苦しかったのは、突然両親を失ったこと。叔父が、父が心血を注いだ葛城工業をめちやくちやにし、一族の恥をさらして投獄されたことだった。

それに比べれば、かつての知り合いから、妻になれと迫られることなんて……

——私は貴方が好きだったわ。悲しいことに、今も……

真那は込み上げる本音を呑み込んだ。

幸せだった頃の、時生の笑顔が思い出せない。

時生が『貴女を助けたい』と言ってくれたときの声が思い出せない。

——泣くな。

真那は悟られないよう、唇の裏を噛んだ。

自分は葛城家の娘だ。

家族と、葛城工業の従業員を守ろうと真剣に働いていた父と、困っているたくさんの人に手を差し伸べてきた母の娘なのだ。

相手が誰であろうと、泣いて怯えて、許しを請うような真似はしない。

誇りを持って自分自身に言い聞かせるうちに、真那の涙は止まった。

「貴方を傷つけてごめんさい。……私は、これから貴方に償うわ」

「別に謝らなくていいですよ。貴女がこれから身の程知らずで成り上がりの、俺の役に立ってくれさえすれば、それでいい」

真那は歩み寄ってきた時生を見据えたまま、落ち着きを心がけ、穏やかに告げた。

「貴方は身の程知らずでも成り上がりでもないわ。私の夫になるのでしょうか。不必要にお互いの感情を刺激するのは控えてほしいのだけど、どうかしら」

時生は身を屈め、真那の目を覗き込み、柔らかな声で言った。

「変わりませぬ、葛城家の『お姫様』は」

皮肉なのか褒め言葉なのか、すぐには判断できない口調。ほんのわずかに眉をひそめた真那に、時生が更に顔を寄せた。

「可愛らしくて、お優しい。今から貴女を犯す男にまで、こんなに優しくして。その優しさが打算か

ら生まれたのだとしたら……尊敬しますよ、たいした策士だ、真那さんは」

顎の下に手を掛けられ、そっと顔を引き寄せられた。

またキスされる、と思ったとき、時生が傍らに腰掛けてきた。

距離の近さに、真那は身体を固くする。だが、キスをされるのかと思った真那は、予想もしなかった感触に、ごくりと息を呑んだ。

真那が動いた弾みで着崩れ、胸元が大きく開いたバスローブの襟元に、時生の手が滑り込んできたからだ。

温かだった肌が、冷たい掌に縮み上がる。

「な……っ……」

乳房に触れられ、真那は思わず手を振りほどこうとする。

だが、中に入った手は、そのまま更に奥へと入り込み、背中にまで回った。無理矢理広げられたバスローブの前が、着崩れて、肌を滑り落ちる。

裸の胸が露わになった。反射的に片手で胸を抱いたが、そのまま真那の身体は時生に抱き寄せられた。

顎を掴んでいた手は、真那の顔を固定したままだ。

時生の唇が、真那の唇を塞ぐ。

胸を隠し、身体を抱いたまま、真那は抗えないキスを受け止めた。

どくん、どくん、と重く低い心臓の音が、身体の中にこだまする。

生まれて初めて男性とキスをした。かすかに感じるのは、時生の匂いだ。不思議な、お日様のよ  
うないい匂いで、子供の頃からあまり変わっていない。

夏休み、別荘の外に遊びに行つて『歩けない』と甘えた幼い真那を背負ってくれたときの匂いが、  
色あせた記憶の中から、鮮やかな色を纏って蘇る。

真那の胸の奥で、なにかが疼いた。

どれほど合理的に振る舞ったところで、真那の気持ちはなにも変わっていないのだ。

時生のことが今でも好きで、傷つけたことが苦しくてたまらない。

心のどこかで、愚かな真那は、時生に触れることにかすかな喜びを感じている。たとえ愛な  
どなくとも、自分の肌に触れる相手が時生で嬉しいと。

大きな冷たい手が肌を這う。

どうしていいのかわからず、真那はひたすら身体を強ばらせる。

唇は離れなかった。柔らかな唇に、自分の乾いた唇を貪られながら、真那は緊張のあまり手を握  
りしめた。

「少しでも我慢してくださいね」

不意に唇が離れ、真那の肌に掌を滑らせながら時生が言う。いたわるような響きに、がちがち  
に固まっていた真那の心が一瞬緩む。

わずかな、幻のような優しさにも縋りたいのだ。

そんな自分が情けなかった。それに、今のキスは、真那のファーストキスで……。心臓の鼓動が

ますます大きくなる。どんなに落ち着き払っているように見せても、自分は小娘なのだど痛感する。

「だ、大丈夫。私は大丈夫だから」

どんなときも自分は意地っ張りだ。本当は怖いくせに。そう自嘲しつつ答えた刹那、真那の身体はゆっくりとベッドに押し倒された。

真那の身体に覆い被さった時生が、真那の乱れた髪をゆっくりとかき上げる。露わになった額に唇を落とし、彼は低い声で真那に命じた。

「下着を脱いで、自分で脚を開いて」

その言葉を理解すると同時に、真那の身体がかつと火照った。

収まりどころのない羞恥心を堪え、真那はショーツに手を掛け、脚を曲げて、それを抜き取る。

脱いだ下着を人目に晒すわけにはいかない。戸惑った末、それを枕の下に隠し、真那はぎゅつと目を瞑って己の膝に手を掛けた。

「ずいぶん素直に従いますね。男と寝たことがあるんですか？」

冷たい声で言われ、真那は涙目で否定した。

「あ……あるわけ……ない……」

その答えに時生がかすかに目を細めた。黒い瞳に、得体の知れない光が宿る。

容赦ない視線に晒され、開いた脚ががくと震えたが、真那は必死に手に力を込める。

目の前にいる人に特別な感情はない、今からすることもなんの意味もない……そう言い聞かせているうちに、自分の身体が他人のもののように思えてきた。

「それでは見えません、脚をご自分の手で持ち上げて」

時生の声に、震えがますますひどくなった。

——こんな、淫らな格好を、時生の前で……っ……

抑えたい羞恥に肌を染め、真那は言われたとおりに脚を曲げて浮かせた。

身体を屈曲させ、秘部を晒した姿勢で顔を背ける。

時生の手が脚に掛かり、ますます大きく開かせた。空に浮いた脚が、びくんと大きく揺れる。

「そのまま脚を押さえていてくださいね」

真那がぐくりと息を呑むと同時に、冷たい指先が、誰も触れたことのない秘裂を、つつつとなぞる。

閉じ合わさっていたその場所が、ひくりと収縮した。

「……っ」

声が漏れ、下腹が痙攣するように波打つ。

「ここ、赤くなりましたね、触っただけで」

からかうような時生の声に、真那はなにも答えずに顔を背け続ける。

なんのことなのか理解したくない。

真那は力を入れてぎゅつと目を瞑り、反射的に脚を閉じようとした。

だが、時生が身体の間割り込んでくる。

弱々しく膝頭に添えただけの手は、強引に位置を変えられた。

「こうやって持って、開いて、俺に見せつけてください」